

か、い、ごう

Daily innovation

Vol.
73
2024
夏号



「TIME」掲載特集号
TIME掲載に至った偕行会の国際事業
世界的な老舗ニュース誌が
なぜ偕行会グループに
取材を申し込んだのか？
言葉や文化の壁も乗り越える
当たり前のように他にない
血の通ったグローバル医療

「TIME」(アジア版) August 5, 2024 (発売日: 2024年07月26日)

よく学び
よく働け
よく遊ぶ

川原 弘久

偕行会グループ 理念

1. 総合的な医療をめざす
2. 真に患者のための医療をめざす
3. 医療従事者の働きがいのある法人運営をめざす



世界的な老舗ニュース誌が なぜ偕行会グループに 取材を申し込んだのか？

『TIME』は世界200カ国で
2千万人が読むナンバーワンの
国際ニュース誌として知られています。
2024年3月、
偕行会へ取材に訪れました。
いったいなぜか、
どこに注目したのか、
偕行会の国際事業に携わる
お二人に聞きました。



国際医療事業部
阿部 一也 事業部長

「デイリーイノベーション」に魅かれて、異業種から偕行会へ転職。現在は偕行会の国際事業を推進するリーダーとして活躍中。

法人本部
白井 宏明 常務理事

信任の厚い偕行会の番頭役。海外展開についても当初から関わり、中国をはじめ多様なプロジェクトをマネジメントしてきた行動派。

世界的なニュース雑誌が 名古屋の民間医療機関へ

白井 どんな経緯で「TIME」から取材申し込みがあったんですか。

阿部 今年の2月ごろに本部へ電話が入り、英語だったので国際部へ回ってきました。でも「え、あのTIMEが取材の申し込み？ そんなはずはないだろう」と、驚くより先に、ウソかと思いました（笑）。

白井 世界一有名なニュース誌ですからね、私だつて疑うと思いますよ。

阿部 あの雑誌に載るのは政治家や有名企業だけかと思っていました。関係する大学や病院の方々も同じ認識なようで、「今度うちが掲載されるんですよ」と言ったたびにびっくりされます。

白井 日本の医療機関がTIMEに取り上げられた例としては札幌医科大学などがありますが、民間では初めてでしょう。しかも先方はずいぶん綿密に調査したうえで連絡してきましたよね。

阿部 はい。まずTIMEアジア版でインバウンド特集の企画が持ち上がり、日本のメディアカルツリズムについて情報を集めるうちに偕行会を知ったようです。

どうやら知名度や規模ではなく、地方都市の民間医療法人が、本気で国際医療に取り組んで

きた」という実績そのものに注目したらしく、これはうれしい驚きでした。

偕行会の国際事業は 30年の試行錯誤がベース

白井 医療研修生や看護師候補生の受入れから数えると、偕行会と海外の関係は30年近くになります。中部地区の民間病院で初めて外国人患者受入れ医療機関認証（JMP）を取得したのも偕行会でした。

阿部 いま国際化をうたう病院は増えていますが、ここまで行動している医療法人はまずないでしょう。TIMEの取材時にも高く評価されていることを感じました。インドネシアではクリニックを設立したり、行政と一体となって医療水準の引き上げに取り組んだり、多様なアプローチを重ねています。

白井 中国でもわれわれのPET健診やホスピタリティが高く評価され、メディカルツーリズムの患者様が増加したほか、医療コンサル提供の話が大きいものだけで3件持ち上がりました。MOU（協力協定）の取り交わしや具体的な検討まで進んでいたのに、コロナ禍で中断せざるを得なくなったのは残念でした。

少子高齢化で医療市場自体が縮小する日本 国際事業は生き残りへの重要戦略

Column

TIMEとは

1923年創刊、発行部数368万部、
世界200カ国、2000万人が読む
世界最大の英文週刊ニュース誌

今回の取材記事は
こちらから▶





偕行会の強みは先端機器と医療技術、
そして日々の挑戦の積み重ねです

原点は人と人の出会いから
たとえば中国人医師の上野先生

白井 偕行会では中国の方をPET健診へ迎えようと2010年から取り組んできました。当時は東名古屋画像診断クリニックのセレブ健診に余裕があったこともあり、岩田理事長を先頭に、上海や大連で日本のがん診療の講演会を企画し、PET健診をPRしてきました。そして東名古屋画像診断クリニック放射線科医の上野小百合先生がいらっしゃったことでインバウンド健診は本格的な取り組みとなりました。

阿部 上野先生の存在は中国健診を促進する最大のセールスポイントになったそうですね。

白井 ええ。上野先生はPET画像診断を用いた脳の研究を行うために中国から来日されていたドクターですが「放射線科医として臨床がやりたい、日本の医師免許も取得したい」とのご希望があり製薬メーカーの研究者からのご紹介で偕行会へ。医師国家試験予備試験の勉強をしながら中国人インバウンド健診の企画、営業、健診時の通訳、結果レポートの翻訳などの業務を担当されました。中国全土に母校蘭州医科大学の卒業生がいらっしゃるので、そのネットワークも非常に貴重なものでした。

阿部 ビジョンも重要ですが、最終的には人との出会いが決め手になりますね。

白井 おかげで東名古屋画像診断クリニックのPET健診はメディカルツーリズムによる患者様が増えました。早期の肺がんが見つかり日本での治療で治療した方もいらっしゃいます。

コロナ禍での体制強化が
今につながっている

阿部 コロナ禍での中断は悔しい限りでしたが、コロナ明けに向けて早くから取り組んでいたおかげで中国での案件もまた話が復活しつつあります。今度は透視コンサルを含めた事業で、まだ先行きはわかりませ

んが、私も山田理事長とご一緒に上海で打合せをしております。
白井 中国だけでなく、長年信頼関係を築いてきたインドネシアでも、市政府と連携し、外国人人材の採用を本格化しています。この取り組みはインドネシア国内でも注目されていると聞いています。

医療機関もみずから市場開拓をしなければ
生き残れない時代

阿部 しかし日本の医療も、うかうかしていると他国に追い抜かれて魅力を失いますよ。

国家財政の行き詰まりにより保険点数の切り下げや制限が進められるなかで、保険診療だけでは経営が困難な時代です。医療機関がみずから自費診療の市場の開拓をせねば生き残れません。

だからこそ国際事業が生き残りへの重要戦略です。ドクターもどンドン外に出てPRしてほしいですね。同じことを話しても、私と現職医師では説得力が違うんですよ。

白井 私はそれに加えて、「事務系の職員も医療スタッフであれ」と言いたい。事務方は医療に直接的な関わりがない立場ですが、それだけに患者に近い視点を持っている。だから保険診療の枠にとられない患者ニーズの発想で、積極的に議論や企画に参加してほしい。名古屋共立病院でも事務スタッフがインバウンド促進のために非常に大きな役割を果たしています。しかし、そうは言っても、現実には「ガイコクジン」に苦手意識を持つ職員はまだ多いでしょう。

阿部 はい。その点は日本人の困った特色でもありますね。でもそんな人も、勇気を出してひとこと挨拶するだけで大きく変わる。自然に意識改革が始まるんですよ。

職員の方々はずい一度国際医療事業部をのぞいてほしいですね。ここには小さな多国籍空間があり、言葉も習慣も違う職員が笑顔で協力し合っています。

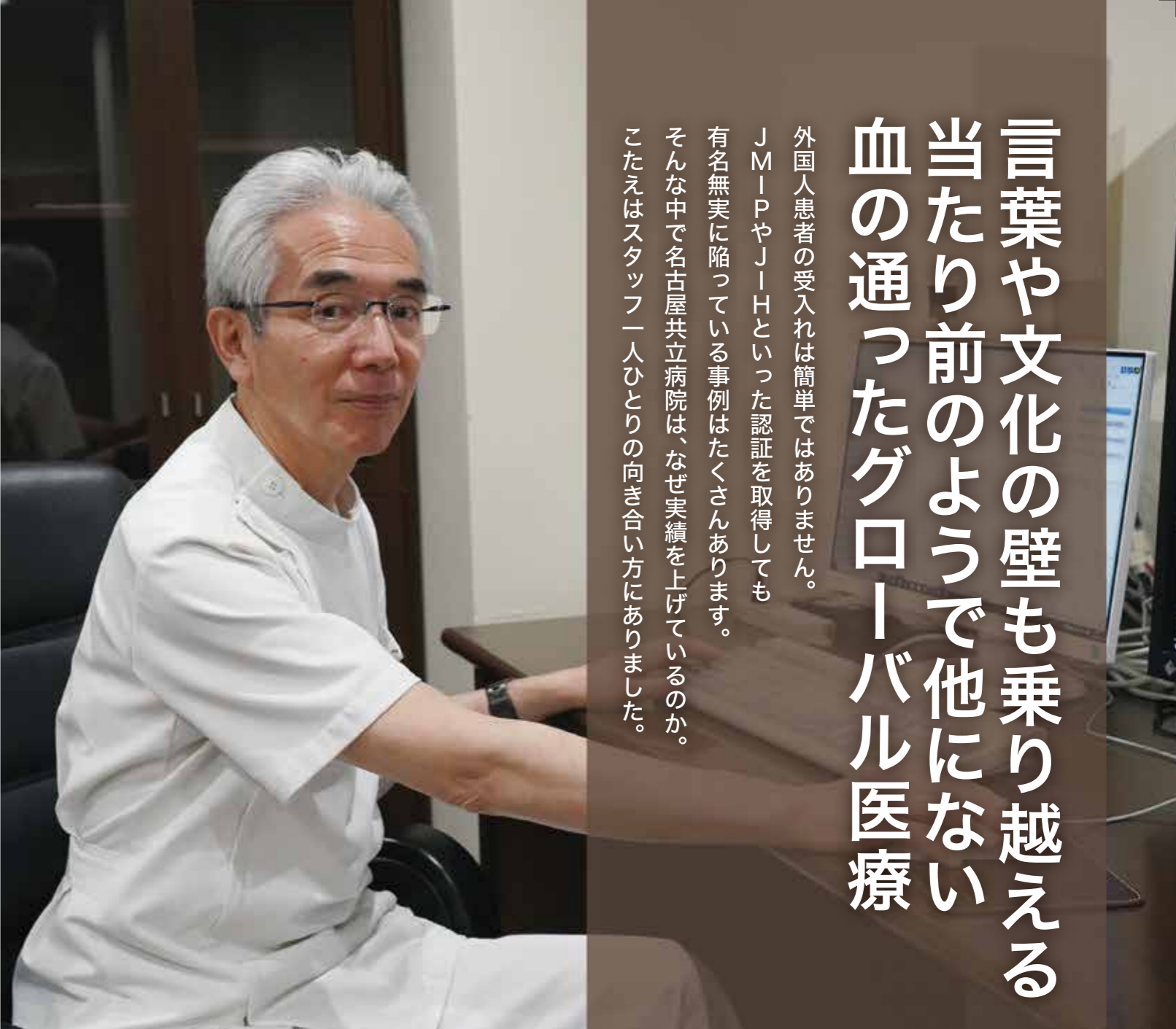
白井 TIME誌が注目したのも、そんなふうに確かな実体がある点かもしれませんね。



国に頼ってはいられない
偕行会の中に多国籍空間を創っています

言葉や文化の壁も乗り越える 当たり前前のようでも他にない 血の通ったグローバル医療

外国人患者の受入れは簡単ではありません。JMIPやJ-IHといった認証を取得しても有名無実になっている事例はたくさんあります。そんな中で名古屋共立病院は、なぜ実績を上げているのか。こたえはスタッフ一人ひとりの向き合い方にありました。



まず患者様の不安を取り除く。この鉄則は世界どこでも同じです。

名古屋共立病院 院長
堀 浩 先生

言葉が通じない不安やとまどいを「オール偕行会」で乗り越える

わたしたち名古屋共立病院（以下共立病院と略）は、外国人患者様の受入れに長く取り組んでまいりました。外国人患者様の受入れ医療機関の認証を取得した医療機関は他にもありますが、全国を見渡してもこれだけ充実した実績を持つ病院はないでしょう。

外国人患者様に対しては、高度な医療を提供するのは大前提ですが、それ以前に不安を和らげることが重要です。とはいえ言葉も習慣も違いますから、当初はこちらもとまどいがちで一步引いてしまうこともありました。

しかし2023年5月、共立病院に「国際診療科」が発足してからは、オール偕行会としての取り組みがますます高度化しています。国際部（国際医療事業部）との連携によって、ワンストップでお問い合わせからご予約、受診の案内、診療、会計までご対応できるようになりました。また英語や中国語だけでなく、スペイン語、ポルトガル語、インドネシア語で応対できる点も大きな特色でしょう。

初期には、患者様の話を理解するだけで大変な手間がかかっていましたが、経験を積んだおかげで職員や医療スタッフが力をつけ、いまでは前日か、場合によっては当日のお問い合わせにもスムーズにご対応できるまでになっています。これは他にはまねのできない共立病院の財産です。

医師、看護師、通訳、医療事務—— 連携プレーで獲得した「ありがとう」

印象深かったのは手の震えに悩んでおられた中国人の患者さんですね。

原因不明の疾病である「本態性振戦」と診断されて3年以上苦しんでおられたのですが、ついに食事も難しい状態になり、日本に住むご友人の紹介で共立病院のFUS（集束超音波治療）を受けることになりました。FUSは耳慣れない最新の治療方法です。しかし来日前に遠隔診療で医師から詳しい説明を行っていたので安心して受診できたとのこと。到着後もビデオ等で詳しい説明を行い治療室に入ったのですが、この方は4時間の治療中すぐに効果が現れました。その劇的な回復ぶりに看護師も歓声を上げたほどです。
2泊3日の入院治療の後には滑らかな円が書けるようになり「予想をはるかに上回る治療効果が得られた」と喜ばれました。

一言のあいさつの積み重ねが 患者さんとの信頼関係をつくる

医療の基本は信頼関係づくり。来日前にオンラインで医師と話して治療のめどをつけられるのは患者様にとっての安心材料ですが、これも間をつなぐ通訳や事

務スタッフがいるから実現できることです。

「訪れる患者様との距離を縮めたくて、少なくとも挨拶だけはそれぞれの国の言葉できるようにしている」と職員が話していました。そんな小さな思いやりの積み重ねこそが、一朝一夕では真似のできないオリジナルな価値なのだと思います。

職員一人ひとりの協力が インバウンド推進の鍵

他国の病院で治療を受けることは誰もが不安に感じます。優れた医療技術や体制が整っていても、患者様自身が治療を受けたいと思ってもらえなければ、満足できる医療を提供することはできません。コロナの猛威が終息し、今後は外国人患者様を受け入れる機会が増えるでしょう。この中で、言語や文化の違いを理解し、患者様の不安を軽減することがますます重要になります。

偕行会の優れた医療技術を広く伝え、患者獲得に貢献するためには、医療職だけでなく、全ての職員が一体となって言語や文化を超えた接し方に取り組み、偕行会グループの医療資源に誇りを持って仕事に取り組む姿勢が大切だと考えています。

名古屋共立病院が
取得している国際認証

▲ JMIP/一般財団法人日本医療教育財団が医療機関の外国人受け入れ体制を中立・公平な立場で評価する認証制度

▲ JIH/渡航受診者の受け入れに意欲と取り組みのある病院として推奨されるもの

